



CT検査で肺がんの発見率アップ 早期発見・診断が治療の鍵

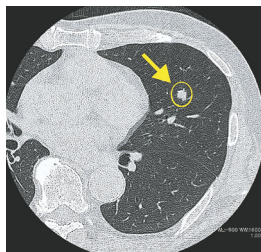


西村内科脳神経外科病院
会長 西村 誠一郎氏

健康診断で毎年胸部レントゲンを撮っているのに肺の病気がないと安心していても多いのではないのでしょうか。しかし、初期の肺がんはレントゲンだけでは鑑別が難しいそうです。西村誠一郎会長に話を聞きました。

「健康診断で『異常なし』と言われ安心していても多いと思います。

そうですね。私も毎年健康診断を受けていますが昨年春の検査結果は異常なしでした。しかしその後、風邪をひき、せきやたんが続いたことと、長期間喫煙をしていたこともあり、肺気腫などの慢性疾患があるかもしれないとCT検査を受けてみました。すると、左肺の中央に直径7mm程度の影が見つかりました。すぐに精密検査（組織検査）を受ける、肺がん（腺がん）と確定診断されたため、切除手術となりました。



CT画像で、はっきりと鑑別できる腫瘍(約7mm)

「胸部レントゲンでは見えないこともあるということです。」

胸部レントゲンでは、心臓や肋骨（こ）骨などに重なっている腫瘍や、2cm以下の初期の腫瘍を見つけるのは非常に困難です。レントゲンで鑑別できるということは、腫瘍そのものがかなり大きくなり、がんが進行していることが考えられます。初期

のがんはほとんど症状がないため、せきや血たん、呼吸が苦しいなどの症状として現れたときには、他の臓器へ転移していることもあります。

「初期の肺がんの発見には、CT検査が有効といえます。」

今のところ、早期発見にはCT検査が有効とされています。CT検査は、5mm以下の薄い断面画像を撮影し、臓器を細かく見ていきます。他臓器との重なりもないので、精密な検査が可能です。その結果、悪性腫瘍の疑いがあれば、組織検査を行います。初期の段階でがんが発見されると、手術をせずに放射線治療や抗がん剤の投与で治療できることもあります。手術の場合も、腫瘍が小さければ、場所によっては開胸せずに内視鏡での手術も可能なので、患者さんの体力的な負担も軽減できます。

「早期発見・診断につながるためには定期的な健診にCT検査を追加するといえます。」

胸部CT検査は、定期健康診断やドック検査などでオプション追加できます（保険適応外）。当院でも今年1月から「肺がんドック」を実施し、がんの早期診断に力を入れています。また、呼吸器に症状がある方は通常の診療でCT検査が受けられることがあります。喫煙歴のある方、慢性の肺疾患のある方は、一度肺の精密検査を受けられることをお勧めします。